平成23年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 キチジ

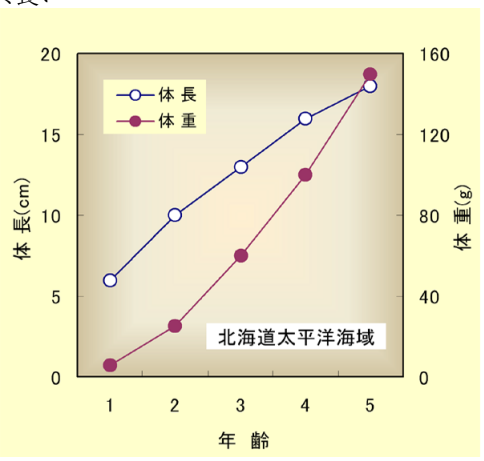
学名　*Sebastolobus macrochir*

系群名　道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所

生物学的特性

寿命:　不明
成熟開始年齢:　3歳
産卵期・産卵場:　春季（3～5月）、産卵場は恵山海丘、襟裳岬沖、釧路沖、落石沖の山状の地形の周辺（水深400～850m）
索餌期・索餌場:　北海道太平洋側沖合の一帯に分布し、主な分布水深は300～900m
食性:　クモヒトデ類、ヨコエビ類、オキアミ類、エビ・カニ類、多毛類、魚類など
捕食者:　マダラ、アブラガレイ、共食い

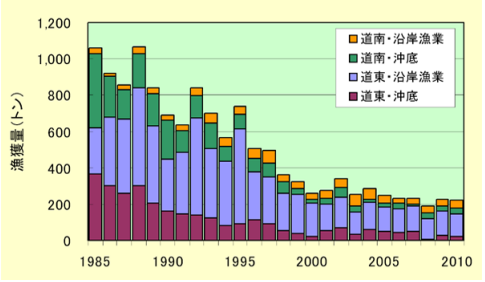


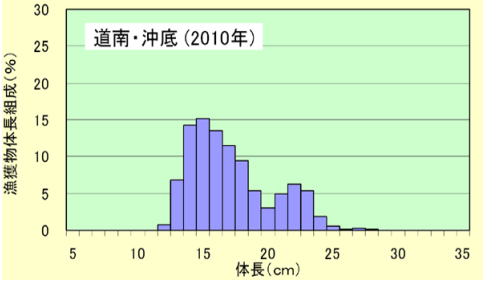
漁業の特徴

沖合底びき網（沖底）の他、えびこぎ網（旧エビ桁網）や刺し網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多い。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。

漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トンを割り込み、1999年以降は200～300トン程度にまで減少した。2010年の漁獲量は221トン（暫定値）であった



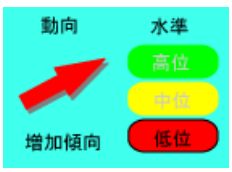


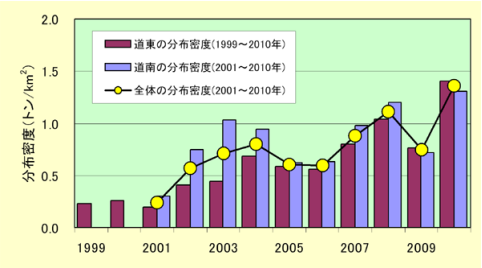
資源評価法

漁船は必ずしもキチジ狙いの操業をしているわけではなく、漁獲努力量が把握できないことから、漁業データとしては、漁獲量の経年変化と漁獲物の体長組成を評価に用いた。また、漁船漁獲物から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。さらに、1999年以降は底魚類を対象としたトロール調査により、調査海域におけるキチジの分布密度を推定しており、これを近年の資源量の指標値として利用した。

資源状態

1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1999年以降200～300トン程度にまで減少した。各海域の漁業種類別の漁獲データがそろう1986年以降の過去25年間（1986～2010年）の漁獲量から、現在の資源水準は低位（最高値～0を3等分して判断）と判断した。また、道東海域における分布密度は、1999年以降全体として増加傾向を示した。全体の分布密度も、2001年から増加傾向にあった。分布密度は2001～2004年には、道東海域よりも道南海域の方が多かったが、2005年以降は両海域で同程度となった。2006年以降5年間の分布密度推定値の変化から、資源動向は増加傾向と判断した。





管理方策

調査船調査の結果から得られた関係式により、2012年の分布密度は1,496kg/km^{2}と推定される。2006～2010年の分布密度平均値に対する増加率は1.59である。資源の主体となっている年級群の成長が、今後鈍化する可能性を考慮し、漁獲量の増加を資源の増加率の半分程度に抑えることにより資源水準の回復を図るため、2006～2010年の平均漁獲量219トンに1.3をかけてABClimitを算出した。資源動向は増加傾向だが、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚が成熟するまで獲り残し再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	285トン	1.3Cave-5yr	ー	ー
ABCtarget	228トン	0.8・1.3Cave5-yr	ー	ー

- 年は暦年（1月～12月）

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 近年、資源は増加傾向にある
- 豊度の高い年級群が確認できる

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される
- キチジの餌生物が生息可能な海底環境の保全・復元を図ることが、資源回復にとって不可欠

執筆者：濱津友紀

資源評価は毎年更新されます。